平成26年度　日本語教育研究協議会
「生活者としての外国人」のための日本語教育ワークショップ
第２分科会

行動・体験中心の活動 を デザインしてみよう
～「教材例集」を参考に～

平成26年10月25日　　於　梅田センタービル

吉田　聖子
（地域日本語教育推進協議会委員、地域人材育成コーディネーター）

第2分科会の流れ

0. はじめに
1. 「カリキュラム案」おさらい
2. 行動・体験中心の活動について
3. デザインしよう！行動・体験中心の活動
4. 質疑応答
5. まとめ （教材例集活用の留意点）

2

はじめに

今日のメンバーはどんな人？

1人1分

3

1.「カリキュラム案」おさらい

4

「カリキュラム案」の背景

〇平成19年7月
・定住外国人の増加を受け，文化審議会国語分科会に日本語教育小委員会を設置。

〇平成20年1月
【報告書】「今後検討すべき日本語教育の課題」

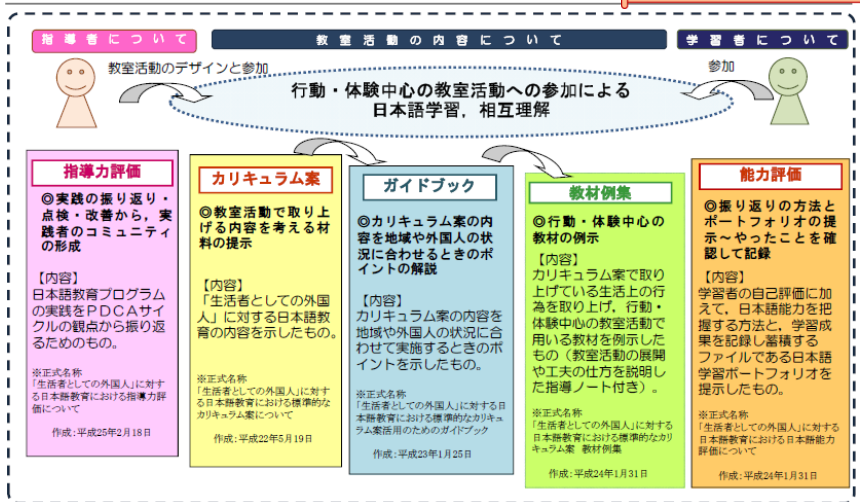
⇒地域社会の一員として外国人が社会参加するのに必要な日本語学習の支援で，以下の3点について早急に検討が必要

① 内容の改善 ② 体制の整備 ③ 連携協力の推進

5

「生活者としての外国人」に対する日本語教育プログラムの実践のための5点セット

『ハンドブック』p7~8参照



標準的なカリキュラム案とは

『ハンドブック』p9～10参照

【基本的な考え】「生活者としての外国人」のための日本語教育：対話による相互理解の促進とコミュニケーション力の向上を図り、「生活者としての外国人」が日本語を用いて社会生活に参加できるようになることを目指す
→そのための具体的な内容やプログラムを検討・作成する際の基となる

【内容】 生活上の行為の事例・・・能力記述、言語要素、社会・文化的な情報など

【利用者】 自治体等の日本語教育担当者、日本語教育コーディネーター的役割者、教室活動を行う人

7

地域日本語教育を動かし続けるPDCAサイクル

『ハンドブック』p9～10参照

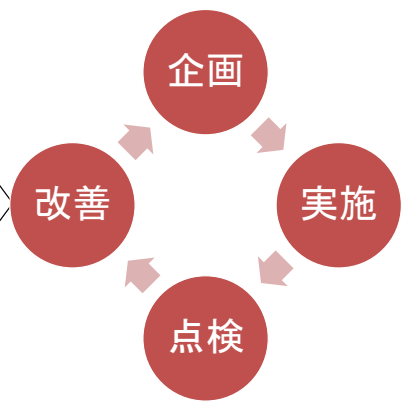
地域の状況に応じた日本語教育プログラムの

企画（Plan）

実施（Do）

点検（Check）

改善（Action）



8

2. 行動・体験中心の活動について

行動・体験中心の活動とは

①「行動・体験中心の活動」と聞いてどんな活動を思い浮かべますか。
思いついたことを、付箋紙1枚に1項目書いてください。

②この中で実際にやったことがあるものはどれですか。印をつけてください。

③①の活動の目的はなんでしたか。

言語学習についての考え方

- **言語学習**

・学習者が「できるようになりたい」と望む生活上の行為を選ぶことで言語学習が進む

- **教室活動**

・生活上の行為と教室活動がつながっていること
⇒体験・行動中心の活動

- **日本語教室から地域社会へ**

・学習者の主体性を重視→学び続ける生涯学習へ
・地域住民との協働活動を取り入れる→対等な人間関係
⇒ネットワークの構築
⇔自立

11

標準的なカリキュラム案で扱う生活上の行為の事例

『ハンドブック』p9～10参照

- **健康・安全に暮らす**
  - 健康を保つ
  - 安全を守る
- **住居を確保・維持する**
  - 住居を確保する
  - 住環境を整える
- **消費活動を行う**
  - 物品購入・サービスを利用する
  - お金を管理する
- **目的地に移動する**
  - 公共交通機関を利用する
  - 自力で移動する
- **人とかかわる**
  - 他者との関係を円滑にする
- **社会の一員となる**
  - 地域・社会のルール・マナーを守る
  - 地域社会に参加する
- **自身を豊かにすることができる**
  - 余暇を楽しむ
- **情報を収集・発信する**
  - 通信する
  - マスメディアを利用する

「労働」「教育」に関するもの→「カリキュラム案」120ページを参照して各自が作成

12

カリキュラム案を行動・体験中心の教室活動に活用するポイント

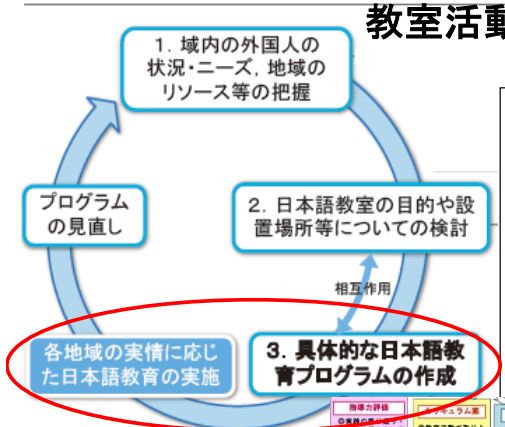
❶ 地域・学習者に応じた教育内容の選択と工夫：
→対象となる学習者の状況、生活課題、ニーズを捉えることから出発
＊「生活上の行為の事例」一覧表（5言語）を活用

❷実際に「できるようになる」ために、行動・体験中心の活動を設計

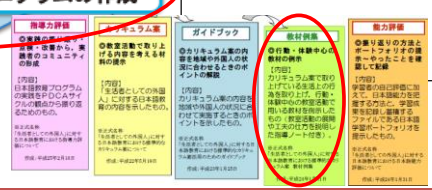
❸ 専門家・地域住民との協働の活動を取り入れる

❹ 対話による相互理解が促されるように活動を工夫

日本語教育プログラムの作成手順における教室活動



（5）教室活動について検討
①行動・体験中心の活動について検討
②教材について検討
③評価について検討



教室活動のポイント

①行動・体験中心の活動について検討

- 学習者の状況やニーズ，日本語のレベルを考慮し，どういった教材や協力者の助けがあれば，実際に行動・体験ができ，その結果，生活上の行為ができるようになっていくか

②教材について検討

- ①で検討した「行動・体験中心の活動」で必要な教材について，この教材例集を参考に検討してください。教材例集で取り上げている各シートはあくまでも例なので，使用する際，活動に必要な工夫をシートに加えることが必要です。工夫のヒントについては，各教材例の指導ノートに書いてあります。

15

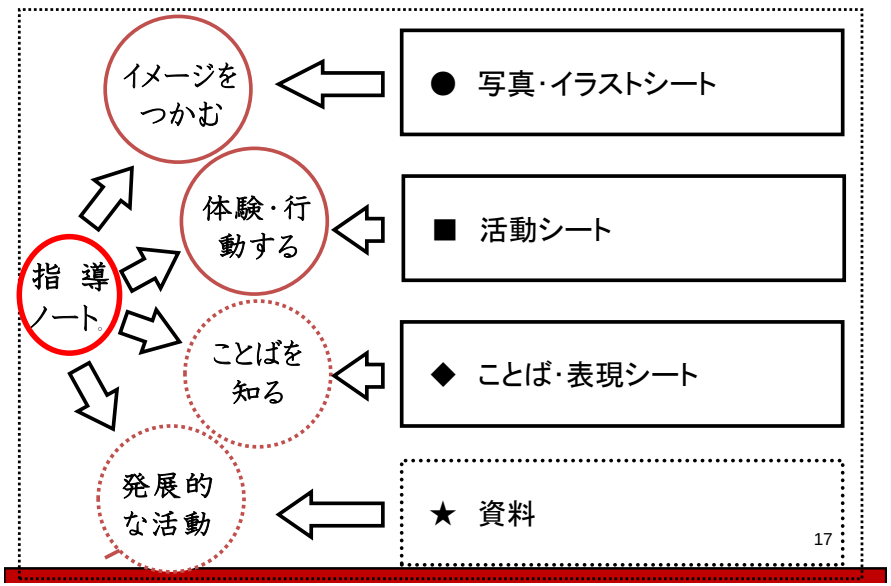
事例紹介
「台風に備えて」

状況：4日前に大型台風が来た
当日も台風が接近中
※教材例集の「地震」を参考に
入門レベル用「台風」を組み立てる

16

教材例集の構成

『教材例集』参照



「教材例集」を参考に

『教材例集』参照

「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案
「教材例集」

「教材例集」を参考にして、自分たちの現場の状況に合わせた活動案を組み立てる

現場の状況

- 来日して半年以内
- 小学生以下の子供がいる
- 日中、日本語ができる家族が仕事で家にいない
- まだ日本語を習ったことがない
- テレビをよくながめている

取り上げる生活上の行為の事例 『教材例集』参照

Ⅰ 健康・安全に暮らす
02　安全を守る
(05)災害に備え、対応する （地震）
「避難場所・方法を理解する・人に聞く」
「地震について理解する」
「身を守る（地震発生時」

↓

「台風について理解する」
「天気予報・台風情報に留意し理解する」

19

教室活動の目標 『教材例集』参照

地震の時に行動できるようにする

↓

台風について基本的なことを知り、
台風の時に行動できるようにする

20

教室活動のねらい

『教材例集』参照

1. 避難場所や避難方法の注意書きを読んで理解できる。
2. 身の守り方について説明を読んで理解できる。
3. 地震に備えることができる。

1. 台風に関連した基本的なことばを日本語で知る
2. 天気予報を見て、「注意報」「警報」がわかる
3. 非常時に近所の人に助けが求められる
4. 台風に備えることができる

21

準備する素材

『教材例集』参照

- 学習者の居住地域の自治体が発行している地震　時の対応に関する多言語情報
- 学習者の居住地域の自治体が発行している避難場所に関するパンフレット
- 非常時用携帯カード（学習者の自治体のものがあればそれを利用，なければ他自治体のものを利用してもよい。または，自作する。）

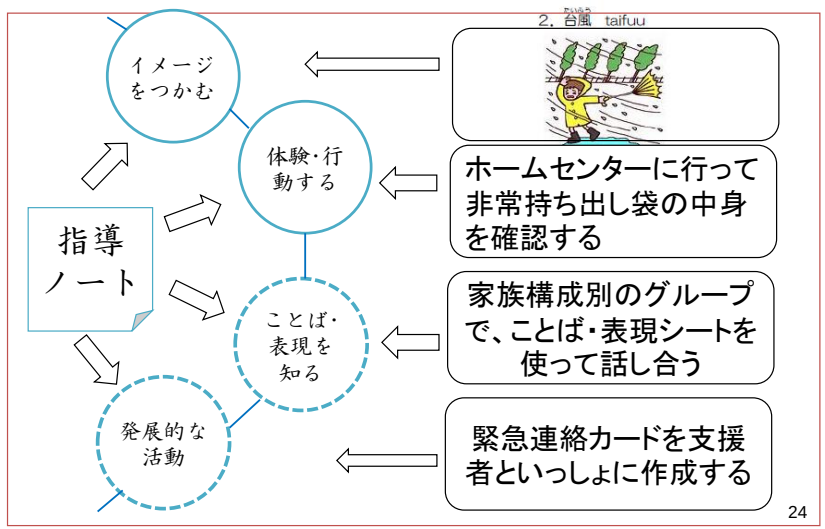
- 「生活者としての外国人」のための日本語教育事業（H19～）平成25年度事業で作成され、このあとのポスター発表で紹介される教材
  「こうべを楽しもう」、「地域でつながる日本語教室」
- 自治体国際化協会の多言語情報

参考情報 （使用した教材）

「生活者としての外国人」のための日本語教育事業（H19～）平成25年度事業プログラムAで作成された教材、文化庁HPよりダウンロード可能
★このあとのポスター発表で紹介されます

- 兵庫県 兵庫日本語ボランティアネットワーク 作成教材　「こうべを楽しもう」改訂版
- 岡山県　総社市　作成教材　「地域でつながる日本語教室」

台風に備える



３．デザインしよう！
行動・体験中心の活動

25

行動・体験中心の活動で教室活動をデザインするポイント

『ハンドブック』p13～14参照

❶ **地域・学習者に応じた教育内容の選択と工夫**：

「生活上の行為の事例」一覧表

（23言語＋日本語ひらがな付き）を活用

まず、対象となる学習者の **状況**

生活課題

ニーズ

を捉える

次に、優先順位をつける

26

活動現場の状況

ステップ１：
学習者情報を整理する

ステップⅡ
活動の目的を考える

27

学習者は日本語で何が出来るようになりたいのか、グループで考える

活動の目的
～ができるようになる

活動の内容
つながる

活動の方法
行動・体験中心の活動

28

発　表

29

行動・体験中心の活動をデザインするとは

❶地域・学習者に応じた教育内容の選択と工夫

・⇒対象となる学習者の状況、生活課題、ニーズを捉えることから出発

内容

＊「生活上の行為の事例」一覧表（5言語）を活用

❷実際に「できるようになる」ため、行動・体験中心の活動を設計

方法

❸ 専門家・地域住民との協働の活動を取り入れる

❹ 対話による相互理解が促されるように活動を工夫

30

4. 質疑応答

質疑応答

行動・体験中心の活動について

①使えそう・やってみようと思ったこと

②疑問に思ったこと・もやもやしていること

5. まとめ
教材例集活用の留意点

教材例集をそのまま使えないの？
教材例集は何のため？

33

「教材例集」活用の留意点

「『教材例集』中の教材例を使用する際には、適宜修正を加えて、地域の実情や学習者の日本語レベルに合わせて、教材例の内容に手を加えたり、多言語情報を活用したり、母語話者の協力を得る等、工夫を行うことが必要」

◆実際の教材は、地域の実情・学習者の状況に合わせて、それぞれの現場で作成する教材例集は、そのための参考例

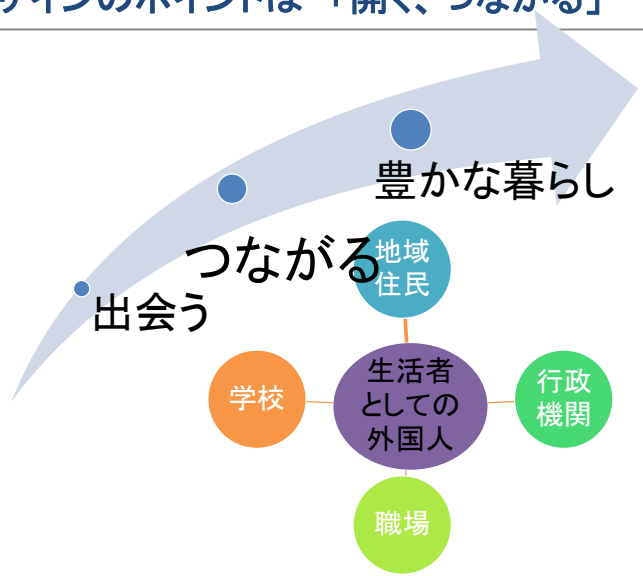
34

まとめ

- 学習者自身が生活の中で実際に必要性を感じ、「できるようになりたい」と望む生活上の行為を適切に選ぶ
  → 積極的な言語学習につながる
- 実際に「できるようになる」ために、行動・体験中心の活動を設計
- 学習者の主体性の重視→生涯学習
- 学習の過程においても地域住民との協働活動をできるだけ取り入れる →教室の活動が、日常生活における対等な人間関係、ネットワークの構築につながっていくように

35

デザインのポイントは 「開く、つながる」



36

ご静聴ありがとうございました

おわり